美郷村高齢者の幸福感をめぐる研究
―幸福に老いるための条件の追求―

――――――――――――――――――――― 社会班（徳島社会学会）―――――――――――――――――――――

長澤　寛二[*1]　　近藤　孝造[*2]　　桂　　啓人[*3]

1．問題意識と調査研究の目的

高齢者問題は日本社会にとってますます深刻なものになってきている。平成15年７月１日付、総務庁統計局発表のわが国の高齢者人口推計値によると、65歳以上の人口は2,420万人で、総人口の19.0%を占め、人口、割合ともに過去最高を記録した。

増加の傾向は今後さらに強まる見込みで、平成37年には3,473万人となり、割合で28.7%、４人に１人以上が65歳以上の高齢者という「超高齢社会」が予想されている。

徳島県の農山村部における高齢化は上のデータよりもはるかに厳しい状況にある。このような状況のもとで、高齢者の幸福をいかに確保するかが緊急の課題となっているといえよう。幸福に老いるための条件が問われているのである。

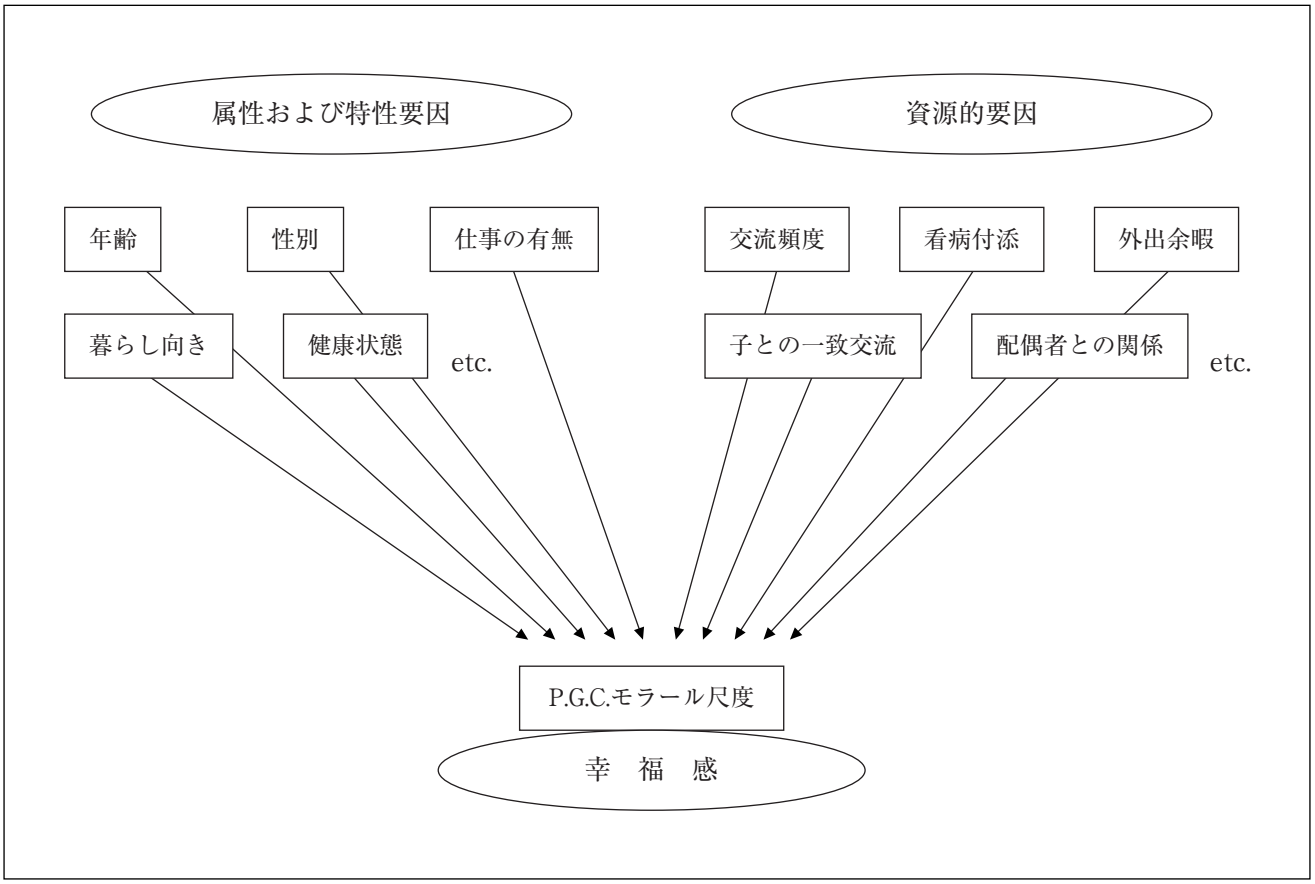

図１　幸福に老いるための条件の分析枠組み

＊１　徳島県立徳島北高等学校　　＊２　徳島工業短期大学　　＊３　徳島県立阿波西高等学校

この課題に答えるための研究の一つとして、高齢者がいかに「老い」を受容して生活しているかを明らかにするための高齢者の「幸福感」に関する研究が1970年代の後半から精力的に進められてきている[1)]。

ここでは、美郷村の全面的協力を得て実施された高齢者を対象とした社会調査データを用いて、「幸福感」を被説明変数として「属性及び特性要因（高齢者個々の性別、年齢、健康状態、生活水準等）」と「適応のための資源（個人的資源、家族・親族資源、社会的支援資源等）」を説明変数として分析する。

この二つの要因によって、高齢者個々の幸福感がいかに影響を受けているかを、調査データに基づいて実証的に検証することを目的とする。そのための分析枠組みとして**図1**を提示し、それに従ってみていくことにする。

2．方　法

1）高齢者の「幸福感」の測定指標

ここで言う高齢者の幸福感とは、「高齢者の精神の安定や自己の現状に対する満足度、あるいは自己の老化を受け入れる積極的姿勢などの状態」のことであり、それを測る指標としては、17項目からなるP.G.Cモラール尺度（以下、モラール尺度とする）を採用することにする。この尺度は高齢者の幸福感を表す尺度として標準化されており、非常に多くの調査で用いられてきて比較にも好都合なものである。

表1で示される、モラール尺度の17質問項目の選択肢は、太字（ゴシック）で示すような「より幸福感の高い」回答をしたほうに1点を、そうではない回答をしたほうに0点を与え、その加算得点でもって幸福感の程度を測定する。従って理論値は0～17点となり、質問項目それぞれの加算得点が高いほど、幸福感の程度も高いことを意味する。「モラールが高い」とは、①自分自身についての基本的な満足感をもっていること、②環境のなかに自分の居場所があるという感じをもっていること、③動かしえないような事実については、それを受容できていることと定義されている[2)]。

この17問のうち、幸福感が高いほう（**表1**ではゴシック文字）の数を合計したものがモラール尺度である。本研究では、モラール尺度の平均値は9.1点であったので，10点以上を「高モラール」群、9点以下を「低モラール」群として分析した。「高モラール」群は179名（51.0%）、「低モラール」群は172名（49.0%）であった。

その平均点は大体11点前後であることが多いが、美郷村の平均点は2点ほど低い9.1点であった。回

表1　モラール尺度の質問項目別の単純集計

質　問　項　目	実数(%)
1．自分の人生は年をとるにしたがってだんだん悪くなってゆくと感じますか。	
そう感じる	250(71.2%)
そう感じない(高)	101(28.8%)
2．あなたは現在、去年と同じくらい元気があると思っていますか。	
そう思っている(高)	111(31.6%)
そう思っていない	240(68.4%)
3．さびしいと思うことがありますか。	
そう思っている	119(33.9%)
思っていない(高)	232(66.1%)
4．ここ1年くらい、小さなことを気にするようになったと思いますか。	
そう思う	137(39.0%)
そう思わない(高)	214(61.0%)
5．家族や親戚や友人との行き来に満足していますか。	
満足している(高)	299(85.2%)
満足していない	52(14.8%)
6．歳をとって、前より役に立たなくなったと思いますか。	
そう思う	252(71.8%)
そう思わない(高)	99(28.2%)
7．心配だったり、気になったりして眠れないことがありますか。	
ある	143(40.7%)
ない(高)	208(59.3%)
8．歳をとるということは、若い時に考えていたよりよいと思われますか。	
よい(高)	59(16.8%)
悪い・同じ	292(83.2%)
9．生きていてもしかたがないと思うことがありますか。	
ある	57(16.2%)
ない(高)	294(83.8%)
10．若い時と比べて、今の方が幸せだと感じますか。	
そう感じる(高)	177(50.4%)
そう感じない	174(49.6%)
11．悲しいことがたくさんあると感じますか。	
そう感じる	84(23.9%)
そう感じない(高)	267(76.1%)
12．不安に思うことがたくさんありますか。	
ある	146(41.6%)
ない(高)	205(58.4%)
13．以前よりも腹を立てる回数が多くなったと思いますか。	
そう思う	95(27.1%)
そう思わない(高)	256(72.9%)
14．生きることは、たいへんきびしいと思いますか。	
そう思う	119(33.9%)
そう思わない(高)	232(66.0%)
15．今の生活に満足していますか。	
満足している(高)	217(61.8%)
満足していない	134(38.2%)
16．ものごとをいつも深刻にうけとめる方ですか。	
はい	202(57.5%)
いいえ(高)	149(42.5%)
17．心配ごとがあると、すぐにおろおろする方ですか。	
はい	149(42.5%)
いいえ(高)	202(57.5%)

注：この表はモラール・スケールの具体的質問内容を表示するために、質問項目別の集計を提示してある。そのために、各質問項目別の実数は無回答のケースの有無によって、多少ばらつきがみられる。

答者の平均年齢は71.3歳であり。今まで都市部で行われた諸研究と比較して、美郷村の調査対象者がそう高齢なわけではない。この尺度からは心理的動揺、孤独感・不満足感、老いに対する態度の３つの因子が抽出されている[3)]が、どの因子も美郷村の数値は低めに出ており、特に老いに対する不安な態度、心理的動揺が強いことが特徴であった。過疎の波にさらされている美郷村の高齢者が置かれている状況の厳しさが、この得点からも推測される。

２）データ収集の手続き

調査は美郷村在住の60歳以上の男女を対象とし、調査票を郵送する郵送式調査をおこなった。配布した714票のうち、回収票は459票で、回収率は64.3%であった。なお、対象とするケース数は、モラール尺度の17質問項目全問を回答した者に限ったため、351名（一部無回答108名を除く）である。

３）調査対象者の特性

性別は男性45.7%、女性54.3%とやや女性が多い。年齢層は75歳以上が36.7%と最も多く、次いで70～74歳が26.4%、65～69歳が22.6%、60～64歳が14.3%の順となっている。また世帯類型別にみた場合は、夫婦のみの世帯が45.3%と最も多く、次いで多いのは子どもと同居の37.0%となっており、また独り暮らし世帯は10.6%となっている。家族のライフ・ステージでとらえれば、向老期、隠遁期にある人々と言える。また健康状態では「無理できない」と答えた人が全体の48.1%を占め、「健康である」は37.6%、「病気がち」・「寝込んでいる」は14.3%である。また自らの生活水準については、「中の中」と答えた人が55.8%と最も多く、「中の下」もしくは「下」は33.0%、「上」もしくは「中の上」と答えた人は全体の10.2%しかなかった。

３．分析結果および考察

１）「属性および特性要因」と幸福感との関連

属性および特性要因と、幸福感との関連は、**表２**に示すとおりである。

幸福感に対して統計的に有意の影響を及ぼしているのは、仕事の有無や仕事をする理由や暮らし向きという経済的な属性要因、本人の健康状態や配偶者の健康状態という身体的な特性要因である。年齢や性差という個人的な属性要因による幸福感の相違は統計的な有意差は認められなかった。また、配偶者の有無や家族構成という家族的な属性要因も幸福感に対して影響を及ぼしていないことが確認できた。このことは全国レベルの調査でも同様であった。以上のことは、老齢期の生活を幸福に過ごすためには、身体の健康維持と経済的ゆとりが重要であることを示している。

表２　属性および特性要因と幸福感との独立性の検定結果

	項　目　名	χ２値	P　値	判　定	標本数
1	年齢	3.12	0.374	〔　　〕	349
2	性別	0.80	0.371	〔　　〕	348
3	配偶者の有無	2.36	0.125	〔　　〕	346
4	家族構成	5.36	0.147	〔　　〕	348
5	仕事の有無	9.81	0.002	〔**　〕	347
6	主な仕事	5.66	0.130	〔　　〕	180
7	仕事量	1.09	0.580	〔　　〕	181
8	仕事をする理由	6.48	0.039	〔*　〕	337
9	暮らし向き	21.13	0.000	〔***〕	349
10	本人の健康状態	37.25	0.000	〔***〕	323
11	配偶者の健康状態	18.35	0.001	〔**　〕	347

*５%水準で有意差有り　**１%水準で有意差有り
***0.1%水準で有意差有り

以下、**表３**～**表７**により統計的に有意差のあった項目を詳しく見ていく。

表３は仕事の有無とモラール尺度との関係を示したものであるが、有職者の方が高モラールの割合が高いことがわかる。

表４は仕事をする理由とモラール尺度との関係を示したものであるが、「自分の能力を生かすため」に仕事をする人の方が高モラールの割合が高いことがわかる。しかし、回答者181名中145名（80.1%）の人が「生活のため」に仕事をしており、「自分の能力を生かすため」に仕事をしているのは22名（12.2%）にすぎなかった。これは、美郷村では経済的に余裕のある人の割合が多くはないので、「生活のため」に仕事をする人の割合が高くなったと推測される。「その他」を選んだ人に高モラールの割合が高い理由ついては不明である。

表５は暮らし向きとモラール尺度との関係を示したものであるが、「暮らし向きが良い（上・中の上）」ほど高モラールの割合が高い傾向にあることがわかる。

表６は本人の健康状態とモラール尺度との関係を

示したものである。本人の健康状態が「良い（健康）」ほど高モラールの割合が高いことが確認できる。「寝込んでいる」人については、すべての人が低モラールという結果であった。

表7は配偶者の健康状態とモラール尺度との関係を示したものであるが、本人の健康状態と同様健康状態が良いほど高モラールの割合が高くなる。なお、配偶者が「病気がち」や「寝込んでいる」人よりは「配偶者はいない」人の方が高モラールの割合は高いことがわかった。特に配偶者が「寝込んでいる」人の低モラールの割合は9割近くにも達している。配偶者の介護に対する負担感の大きさが表れているようである。

表3　仕事の有無　**

	高モラール(%)	低モラール(%)	実数(人)	モラール尺度平均値
有職	59.4	40.6	187	10.0
無職	42.5	57.5	160	8.1

表4　仕事の理由　*

	高モラール(%)	低モラール(%)	実数(人)	モラール尺度平均値
生活のため	54.5	45.5	145	10.3
自分の能力を生かすため	77.3	22.7	22	8.8
その他	78.6	21.4	14	10.0

表5　暮らし向き　***

	高モラール(%)	低モラール(%)	実数(人)	モラール尺度平均値
上	66.7	33.3	6	11.2
中の上	75.0	25.0	32	11.3
中の中	55.6	44.4	189	9.9
中の下	44.1	55.9	68	8.0
下	26.2	73.8	42	8.0

表6　本人の健康状態　***

	高モラール(%)	低モラール(%)	実数(人)	モラール尺度平均値
健康	67.2	32.8	131	10.7
無理できない	48.8	51.2	168	8.9
病気がち	22.0	78.0	41	6.3
寝込んでいる	0.0	100.0	9	3.8

表7　配偶者の健康状態　**

	高モラール(%)	低モラール(%)	実数(人)	モラール尺度平均値
健康	65.5	34.5	113	10.3
無理できない	49.2	50.8	124	9.2
病気がち	36.4	63.6	22	7.5
寝込んでいる	11.1	88.9	9	5.3
配偶者はいない	43.6	56.4	55	8.3

*5％水準で有意差有り　**1％水準で有意差有り　***0.1％水準で有意差有り

2）「資源的要因」との関連

適応のための資源と幸福感との関係は、**表8**に示すとおりである。

適応のための資源とは友人・知人などの個人的資源、子や孫などの家族・親族資源、公的サービスなどの社会的支援資源である。配偶者に関しては、他の家族とは異なり血縁関係がないので個人的資源として扱う。具体的な質問としては、子ども・親族・近所・友人との交流頻度、子どもとの間でのサポートの授受、子どもとの生活上の意見の不一致度、夫婦間関係、外出と余暇活動を設定し、モラール尺度との関係をみることで適応のための資源と幸福感との関係を考察した。

まず、交流頻度の中で有意差のあったものは、友人・知人との交流頻度だけであった。友人・知人との交流頻度が高いほど高モラールの割合が高くなる。近所・子ども・親族という地縁・血縁関係という共同体的な人間との交流頻度は幸福感に影響を与えているとはいえず、友人・知人という自分で築き上げてきた人との関係が重要であるということが確認できた。

子どもとのサポートの授受については、自分の病気や怪我による子どもからのサポートは幸福感に関係しないが、子どもの看病や孫の世話などによる自分からのサポートの提供は幸福感に関係することがわかった。子どもの看病や孫の世話というサポートの提供者の方が低モラールの割合が高くなる傾向にある。子どもや孫の面倒を見ることが生き甲斐になるという通説もあるが、今回の調査ではむしろ“重荷”になっていることがうかがえる。子どもとの生活上の意見の不一致を否定する程度が高まるにつれて高モラールの割合も高くなっている。子どもとの生活におけるストレスが幸福感に影響していることがうかがえる。

表８　資源的要因と幸福感との独立性の検定結果

	高モラール(%)	低モラール(%)	実数(人)	モラール尺度平均値
別居している子供との交流頻度			327	
ほぼ毎日	50.0	50.0	22	8.8
週に１～２回	48.1	51.9	106	8.9
月に１～２回	53.8	46.2	132	9.3
年に数回	48.7	51.3	39	9.2
ほとんどない	50.0	50.0	28	8.1
兄弟・親戚との交流頻度			349	
ほぼ毎日	66.7	33.3	6	9.2
週に１～２回	54.2	45.8	72	9.1
月に１～２回	51.5	48.5	171	9.2
年に数回～ほとんどない	48.0	52.0	100	9.1
近所の人との交流頻度			324	
ほぼ毎日	62.3	37.7	53	10.1
週に１～２回	51.4	48.6	144	8.8
月に１～２回	48.3	51.7	58	9.8
年に数回	51.9	48.1	27	8.3
ほとんどない	38.1	61.9	42	6.3
友人や知人との交流頻度**			348	
ほぼ毎日	72.7	27.3	22	10.5
週に１～２回	54.2	45.8	96	9.4
月に１～２回	55.0	45.0	129	9.6
年に数回	46.2	53.8	65	8.9
ほとんどない	25.0	75.0	36	6.7
誕生日や盆暮れ、敬老の日などに子供からのプレゼント			343	
ある	53.0	47.0	319	9.4
ない	33.3	66.7	24	6.8
病気や怪我の看病や病院への子供からの付き添い			335	
ある	49.3	50.7	205	8.8
ない	53.4	46.6	133	9.6
誕生、盆暮れの子供へのプレゼント			334	
ある	53.2	46.8	231	9.5
ない	47.6	52.4	103	8.5
子供の病気、怪我の看病や孫の世話**			335	
ある	44.5	55.5	218	8.8
ない	60.7	39.3	117	9.8
子供との生活の不一致***			316	
そう思う	25.6	74.4	43	6.7
ややそう思う	44.1	55.9	59	8.1
あまりそう思わない	56.5	43.5	147	9.9
そう思わない	61.2	38.8	67	10.3
配偶者は頼りになる*			242	
なる	55.9	44.1	202	9.6
ならない	40.0	60.0	40	8.4
配偶者は思いやりがある*			232	
ある	58.4	41.6	166	9.7
ない	40.9	59.1	66	8.8
配偶者といると休まる*			230	
安まる	59.2	40.8	169	9.8
安まらない	41.0	59.0	61	8.7
配偶者と買い物をする			230	
頻繁	49.2	50.8	59	9.2
時々	56.2	43.8	137	9.8
ない	52.9	47.1	34	9
主な家事の担い手*			261	
妻だけ	48.5	51.5	134	9
主に妻	59.8	40.2	107	10.1
主に夫	25.0	75.0	20	7.8
近所への外出と余暇活動			324	
毎日	62.3	37.7	53	10.6
週１，２回	51.4	48.6	144	9.3
毎月１、２回	48.3	51.7	58	9
年に数回	51.9	48.1	27	9.2
ない	38.1	61.9	42	7.5
遠くへの外出頻度			320	
毎日～週１，２回	54.8	45.2	73	9.3
毎月１、２回	55.9	44.1	93	10
年に数回	53.2	46.8	111	9.6
ない	34.9	65.1	43	6.8
余暇に対する考えかた			288	
自分を高める	61.1	38.9	36	9.6
つきあい程度	56.0	44.0	91	9.8
気晴らし程度	46.6	53.4	161	8.8

* ５％水準で有意差有り　　** １％水準で有意差有り　　*** 0.1%水準で有意差有り

夫婦間での関係については、夫婦で買い物に行く頻度以外の項目で有意差が見られた。配偶者は「頼りになる」、配偶者は「思いやりがある」、配偶者と居ると「心が安まる」と答えた人ほど高モラールの割合が高くなっている。また、家事分担では「妻だけ」や「主に夫」が担当するよりは「主に妻が担当し夫も少し手伝う」と答えた人に高モラールの割合が高い。ここには、伝統的な性別役割を残しつつも夫が家事に参加することが幸福感につながっていることが読み取れる。

最後に外出と余暇活動については統計的な有意差は認められず、幸福感に大きな影響は見られないことが確認できた。

４．結論および今後の課題

本研究は老年期というまさに加齢による心身機能の衰退、社会・経済的地位や役割の喪失によって、新たに自分の生きている意味・価値が問題となる時期において、高齢者個々人のいだく幸福感が、属性および特性要因と資源的要因によって、いかに影響を受けるかを検証することを目的とした。

調査結果を要約すると、まず「属性および特性要因」においては、高齢者の幸福感に重要な関係があるのではないかとみられていた性別・年齢・配偶者の有無などは統計的に有意の影響を及ぼさないことが判明した。また、家族構成も直接には影響を及ぼしていない。従来、直系家族や孫・子との同居は高齢者の幸福によい影響を及ぼすとされることが多かったが、今回の調査ではこれは明らかにならなかった。

むしろ健康状態といった身体的特性要因や、また職業の有無や経済水準といった物質的な豊かさの要因によって、幸福感は大いに規定されるという結果となった。健康状態では本人の健康状態のみならず、配偶者の健康状態も幸福感を左右している。職業に関しては、生活のために仕事する人よりも、自分の能力を生かすために仕事をしている人に高モラール者が多い。この項目は経済水準とも関連しているといえよう。つまり、単に生活のためにする仕事はそれほど幸福感に寄与していないとも考えられる。

「資源的要因」においては、交流頻度に関しては子ども、兄弟・親戚、近所の人との交流頻度は幸福感に統計的に有意の影響を及ぼしていない。しかし、友人や知人との交流頻度が密なことは明らかに影響を及ぼしている。友人や知人という自分で獲得した資源が潤沢なことが達成感や満足感に寄与していると思われる。また、配偶者との関係も幅広く幸福感に影響している。配偶者がたよりになる、思いやりがある、配偶者といると安まることが高モラールを導いている。先に述べた配偶者の健康が有意な影響を与えている事実と合わせると老年期においては他の家族よりも配偶者の占める位置の重要性が増している。

逆に、子どもと生活の考え方が違うことや孫の世話をしなければならないことは、低モラールを導いている。配偶者以外の家族は高齢者にとって、ともすればストレスの原因にもなりうる存在といえよう。高齢者にとっては孫の世話も体力的等の負担になることが多いことが推測され、孫との交流が直接幸福感には影響していない。

高齢者問題を語るとき、これまでの家族社会学的研究においては高齢者の扶養という問題がその主流を占め、援助され保護される受動的・依存的な老人像が描き出されやすかった[4)]。

しかし、本研究で明らかになったことは、高齢者自身が主体性と自立性を発揮できる生き方を志向しているという事実である。高齢者は子や孫との関係よりも配偶者との関係や友人・知人との関係によって高モラールに導かれている様子がうかがえる。これは、運命的な要素が強い資源よりも、自分で開発した個人的資源を活用して生きていくことに幸福をより多く感じているともいえよう。これらの事実をふまえて、高齢者の主体性と自立性の実現に具体的に貢献できるような援助の研究を今後すすめていくことも必要であると思われる。

本人の健康や暮らし向きに行政が留意することは当然であるが。高齢者の幸福感には、それ以外に、特に配偶者の健康状態や配偶者との親和性、友人との交流の喪失（本人の病気や友人の病気・死去によるものが多いと推測される）が大きな影響を与えており、配慮すべき項目である。従来、これらは行政の視点からは見過ごされてきた感もある。高齢者が

幸せに老いるためには、高齢者の取り巻く人々への細やかな施策・対応も必要とされているのではないだろうか。

注

1）藤田利治・大塚敏男・谷口幸一（1989）：老人の主観的幸福感とその関連要因、東京都老人総合研究所編『老年社会学』29、pp.75-85。

前田大作・坂田周一・浅野　仁・谷口和江・西下彰俊（1988）：高齢者のモラールの縦断的研究―都市の在宅老人の場合―、東京都老人総合研究所編『老年社会学』27、pp.3-13。

古谷野亘（1984）：主観的幸福感の測定と要因分析、東京都老人総合研究所編『老年社会学』20、pp.58-64。

2）杉井潤子・本村汎（1992）：高齢者の主観的幸福感をめぐる一研究、日本家族社会学会編『家族社会学研究』NO.4、pp.54-55。

3）杉井潤子・本村汎（1992）：高齢者の主観的幸福感をめぐる一研究、日本家族社会学会編『家族社会学研究』NO.4、pp.64。

4）蜷川典子（1984）：老年期の家族役割と夫婦関係、副田義也編『日本文化と老年時代』中央法規出版社、pp.149-159。

文　献

金子勇編著（2002）：『高齢化と少子社会』講座社会変動8、ミネルヴァ書房。

杉井潤子・本村汎（1992）：高齢者の主観的幸福感をめぐる一研究、日本家族社会学会編『家族社会学研究』No.4。

直井道子（2001）：『幸福に老いるために―家族と福祉のサポート』勁草書房。